

木ノ下歌舞伎、三番叟と娘道成寺の二本立て舞踊公演を観ました。  
三番叟はとにかくハッピーな舞踊。  
そして娘道成寺はとにかく怨念こもった舞踊。

とにかくとにかく、この二本立て舞踊公演は対照的ですが気が飛んで他の事考え始めちゃう私を飽きさせなかった。  
私がクラシックバレエ好きなのもあってかストーリーのある舞踊はダンサーのまた違う化けた部分が引き出される。ひさびさ舞踊観た！っていう満足感。全く違うテイストの舞踊なのに美術の紅白幕によって地続きにされている。約30分ずつというのも舞踊を見るにはちょうど良い長さだった。

杉原演出の三番叟は、「あー、こうやって若者的思考でもって古典が等身大で表されていくのはいいよね」っていう、古典との新しくておいしくもちょっと皮肉な関係。  
言葉に弱い私は、最初の渡辺守？の解説はあんまり耳に届いてこなかったんだけど、大方は分かったのなるほど、と思いながら観た。  
もはや、すり足なんてできない世代ですからね、冒頭のすり足はギャグのようでありました。(足袋が金色だし)ていうか、なんていうか、全てがおちょくりのセンスに満ち溢れている。いや、リスペクトの精神もだいぶ感じるから、「古典おちょくりすべくとな作品」と言って良い。

きたまり演出の娘道成寺、これはほんとにすごかった。  
きたさん本人にも言いましたが、「目じりの先にあるもの」を感じる舞踊。  
そう、昔から日本人が大事にしている舞踊の基本を受けて立っている。  
別に日本舞踊をやっているってわけでもないし、すり足も出てこないし、いわゆる和風をやらない、自分の身体でもって歴史を背負う。  
名人芸です。もうね、人間国宝になったらいい。  
少女～大人の色気～怨念～優しさ～強さ～そして時たま出てくる大阪のおばちゃん←これがねー、なんとも言えなく良い。  
いろんなきたまりが出てきて良かった。

で、この相反する二つの演目ですが、三番叟は最初から爆音の中、ハッピーで楽しく踊っているわりに最後はみんなで小さなちゃぶ台を囲んでご飯を食べているというどん詰まり的な物悲しい感じもする終わり方に対して、娘道成寺は最後、盛り上がりは頂点に達し、なにかその先に光（それは、終焉（終演）への光なのか、未来なのか）を感じて終わる。  
そして場所の観念も対照的で、三番叟は「ここ・この場所・今」であるに対して娘道成寺は空間の先にさまざまな場所や時空、背景がひろがった。

それらがなんとも狂言と能の関係のようでもあり、この組み合わせの同時上演は結構ナイスチョイスだな、と思った。

白神ももこ